

〔論 文〕

南信子 そのキリスト教保育論

Miss Nobuko Minami, Her Approach to Early Childhood Education and Care for Christ

畠 山 祥 正*

要旨

前稿に続き、「南信子・輪島道友による対談 あなたがたの教師はキリスト一人だけである——キリスト教保育の理念を求めて——」の後半部分「キリスト教保育の哲学」で語られている、南信子のキリスト教保育論を検討する。南にとって、礼拝は保育（幼児の生活）の一部である。礼拝は、キリスト教保育の中心でありながら、生活に溶け込むべきものであり、保育の営みすべてに、礼拝の精神が浸透しているべきである。

キーワード：教職論・保育者論／キリスト教保育／南 信子

はじめに

前稿では、「南信子・輪島道友による対談 あなたがたの教師はキリスト一人だけである——キリスト教保育の理念を求めて——」（南信子編著『花の蕾のひらくとき』（2000年3月）390～404ページ、以下「証言」と略す）を手がかりに、北陸学院保育短期大学（当時）設立のために南信子が招聘された経緯とその意義を、幼児教育史上から考察した。¹

本稿は、その「対談」の後半部分「キリスト教保育の哲学」で語られている、南信子のキリスト教保育論を南の著作・論文をもとに読み解く試みである。

最初に「証言」から重要な要素を5つ抽出し、それぞれについて検討してゆく。礼拝と保育（幼児の生活）のダイナミックな関係が見えてくる。

1.「対談」中の「キリスト教保育の哲学」の検討

「対談」の後半部分「キリスト教保育の哲学」では、南信子のキリスト教保育論が語られている。本節では、南信子の主張を整理しつつ、若干の考察を試みたい。なお、「対談」を含むこの著書は

一般には入手しにくいので、「キリスト教保育の哲学」に若干手を入れ注に付した。²

南は最初に、「率直に言いまして、私は現在のキリスト教保育に危機感をもっています」と語り、キリスト教幼稚園の「経営的配慮の先行」（「証言」308）を批判する。³

以降、南信子が語るキリスト教保育論の骨子は、次の5点にまとめられる。

- a) 方法論（カリキュラム論）を「三層構造論」と称し、まず基底に①「自由遊び」、次に礼拝を中心とする②「生活」、そして③「文化的・創造的活動」が、「構造化」し、かつ「統合」されなければならない。「この「統合」はあくまでも子どもの内面の「自発性」「活動性」「創造性」においてなされなければなりません。」（「証言」399）
- b) 子どもの「発達」の系統性の先に、「神の「創造の秩序」を見る。子どもの「発達」の過程というのは、まさに神の「再創造」の過程ともいえる。（「証言」400）
- c) 教会での「教会教育」は「伝道」であるが、「幼稚園は子どもの「生活の場」そのものなのです。あえて言えば「礼拝生活」の「日常化」なのです。（「証言」400）
- d) キリスト教の幼稚園の教師は、キリスト者で

なければならないのか、教会の教育的使命はどこにあるか。（「証言」402）
e) 子どもにおける「霊性（スピリチュアリティ）」キリスト教保育は、「心」と「身体」に「霊性」が加わらなくてはならない（「証言」401）。あくまでもキリスト教保育は「霊性の教育」をめざさなくてはなりません（「証言」402）。

上記は、対談の流れに沿って並べたものであるが、まず、e)の「霊性の教育」について触れておきたい。「霊性」を誤解されると先に進めないからである。

1－(e1)「霊性」とは

「霊性」は、今日流行の日本語「スピリチュアル」（不思議体験）ではない。宗教的な内容に応答する心の部分である。

金子晴勇⁴によれば、西洋の人間観において、「心の働きは「霊性」・「理性」・「感性」に分けられるが、ヨーロッパ文化の特質は一般的にいつて「霊性」と「理性」との激しい対決に求めることができる」（p.188）という。

「霊性」（spirituality）は、理性的な精神性と区別された信仰の内面性である。「理性と霊性の区別がなされ、理性が信仰内容を合理的に解明し、知識を組織的に叙述していくのに対し、霊性は理性によっては把握しがたいキリスト・神・神性との信仰による一体化を志向」する。（p.184）

ルターは、霊性によって理性が導かれてこそ、理性も正しく用いられるという(p.185)。⁵

南が、「キリスト教保育は、「心」と「身体」に「霊性」が加わらなくてはならない」というとき、礼拝を中心とする「生活」が「霊」の部分に関わることを言っていると思われる。「霊性」は、保育（生活）で養われるがゆえに、その主張は、保育＋礼拝という枠組みとは異なると言わねばならない。

1－(e2)「霊性」を養う難しさ

子どもの「霊性」を養うのは礼拝であるが、南は「霊性」を養う難しさを明言している。「私は、できる、できない、という「人間的可能性」を言っているわけではありません。「祈り」

ということを言っているのです。礼拝は「祈りのかたち」でしょう。礼拝においてイエス・キリストを聖書に基づいて「紹介」することです。ただ「紹介」しさえすればよいのです。後は、神様と教会にお任せする。キリスト教の幼稚園はこの「単純な事実」に信頼すればよいのです。」（「証言」402）

霊性の働きは神の領域であるから、保育者は人としてできる限りのことをすればよい。否、人ができることは、イエス・キリストを聖書に基づいて「紹介」することであり、「信仰に生きる者の姿勢は、不思議な力で伝わる」。たしかに、人は、伝える人が信じられるから耳を傾ける。⇒この問題は、3－(c)で再度検討する。

2. 南信子「キリスト教保育論」検討の範囲

「対談」はよくまとめられているが、それだけでは理解しにくい。本節ではまず、南信子の著書や論文の全体像を把握し、「証言」とつぎ合わせる対象を限定する。

南信子による著書は表1に、論文等は表2にまとめた。双方とも原則として新しいものを上に配置した。⁶

南信子の「キリスト教保育論」を学ぶには、何を読めばよいのか？

結論から言うと、以下の2つである。（なお、以降、次の略称を用い、ページ数を数字で示す。）

- 1) 1990『今日を生き未来にはばたく子らと共に』⇒『今日を生き』と略記
表3には、同書の章立て及び元になった論文を示した（表2にも記載）。
- 2) 1998「キリスト教保育の実践的課題(1)～(4)」(キュックリヒ記念財団「乳幼児の教育」(季刊)82～85号 ⇒『キュックリヒ82』（～85）と略記

2つに限定するのは、1)が直前に発表した論文まで収録していること、2)が1)の後に発表された「キリスト教保育論の総まとめ」だからである。そしてその後に「対談」がなされた(1999年10～11月)。

* HATAKEYAMA, Yoshimasa
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
教育学・教職論

表１　南信子著書一覧

	出版年、書名（著書1-6　共著7-9　その他10-13）
1	2 0 0 4『幼な子とともに　南信子先生から学んだこと』2004. 9　179p
2	2 0 0 0『花の蕾のひらくとき　北陸学院幼稚園の物語』編著　2000. 3　404p
3	1 9 9 7『輝くひとみをいつまでも　子どもたちの未来を見つめて』福音社/三育協会(発売) 1997. 2　ix, 179p （サイنز・オブ・ザ・タイムズ誌(1994. 2～1996. 9)に「うれしき朝よ　幼子の未来を見つめて」として掲載したものに、「保育者をめざす若い人たちへ」（名古屋柳城女子短期大学オリエンテーションゼミナールにおける講演）を加えた）
4	1 9 9 0『今日を生き未来にはばたく子らと共に』とちの木会，能登印刷出版部　1990. 11　277p
5	1 9 8 8『うれしき朝よ　幼児教育随想』北陸学院短期大学附属幼児児童教育研究所　1988. 1　143p （1986年、北國新聞に「しつけノート」と題して毎月掲載したものに加筆。「六　幼児観」は「キリスト教保育」誌から）
6	1 9 8 4『子供が生きる　母親・保育者・子供の明日のために』南信子講演集（関東教区保育者研修会）1984. 9　131p
7	1 9 8 2『幼な子に生きよう　シリーズⅠ・キリスト教保育』（キリスト教保育連盟、1982年12月）「キリスト教保育の今日的課題」215～258（初出「キリスト教保育」1981. 1～3）
8	1 9 8 3『幼な子に生きよう　シリーズⅡ・保育者像』（キリスト教保育連盟、1983年3月）「幼児とのであい」17～29（初出「キリスト教保育」1976. 11）
9	1 9 7 4『キリスト教幼児教育概説』（黒田成子・松川成夫・奥田和弘・今橋朗編　日本基督教団出版局、1974. 12）「キリスト教の幼児観」（第1部第2章）34～46
10	1 9 8 6『折りおりの詩　幼い日の思い出ノートから』南信子，中村秀子，瀬戸るり子著　北陸学院短期大学付属幼稚園　1986. 10　129p
11	1 9 7 0『おもかげ　アイリン・ライザー先生の生涯』南信子，ヴァージニア・デイター編著　北陸学院短期大学　1970. 10　120p（Deter, Virginia A., 1925-　）
12	1 9 6 1『北陸学院保育短期大学十年史』南信子編、北陸学院保育短期大学　1961. 10　294p
13	1 9 8 1『金沢教会百年史』（分担執筆・1946～1959年を担当）1981. 5

表２　南信子論文一覧

著書	年月	論文名　（小見出）	掲載誌	巻号	ページ
	199804	キリスト教保育の実践的課題(1)ー生きる喜びを知り、希望に生きる教育ー 1キリスト教保育の目的 /2キリスト教保育の内容 /3キリスト教保育のPriority（優先課題）a遊びを重んずること b生活を重んずる c聖書の話をもく聞く機会があること d子どもと共に祈ること	乳幼児の教育	82	4-11
	199807	キリスト教保育の実践的課題(2)ー生きる喜びと希望を共有する家庭教育ー 1幼稚園・保育所と家庭の共通の課題 a愛情による安定感 b所属感 c自己表現の欲求 d成功感 e聖なるものへの憧れ /2人間の基本的欲求と教育		83	4-11
	199810	キリスト教保育の実践的課題(3)ー保育者の役割ー 1幼児の宗教性 /2カリキュラム aカリキュラムの作成 b礼拝 c保育者の使命 /3開拓的・指導的役割		84	4-11
	199901	キリスト教保育の実践的課題(4)ー実践例に学ぶー 1実践例 /2実践例に学ぶ 1)伝道と教育 2)キリスト教保育における行事 3)キリスト教保育における金銭教育		85	4-11
4	199004	生きる力をⅠ子どもの環境をめぐる問題　序　多様化する幼児教育/1子供が主体の幼児教育であること/2幼児教育の理想と目標/3幼児教育の総合的研究の必要性/4キリスト教保育カリキュラムの構造化	キリスト教保育	253	6-12
4	199005	生きる力をⅡキリスト教保育の目標をめざして　序　移りゆく社会に大人と共に生きる子供/1主観的理解/2人格形成の過程/3共感的理解/4二十世紀に大人と共に生きる子供		254	6-12
	198510	両親教育（一般的なあり方）	キリスト教保育	199	32-33
	198511	両親教育（子供を見る目）		200	32-33
	198512	両親教育　今日的課題		201	32-33
	198601	両親教育　両親へのメッセージ		202	32-33
	198605	キリスト教保育創始百周年に思う		206	4-5
4	198409	幼児教育における個性と創造性の育成　オープン・エデュケーションの理論をめぐって　序/オープンマインド/保育室/クラス編成/教師の役割/カリキュラム/創造性の育成	キリスト教保育	186	6-12
4	198410	集団生活における人間形成　縦割り保育の理論をめぐって　家族的グループ編成/集団の多面性/自由遊び		187	6-12
7	198101	キリスト教保育の今日的課題一　多様化する幼児教育　1子供が主体の幼児教育であること /2幼児教育の理想と目標 /3幼児教育の総合的研究の必要性 /4キリスト教保育カリキュラムの構造化	キリスト教保育	142	6-11
7	198103	キリスト教保育の今日的課題二　移り行く社会に大人と共に生きる子供 1主観的理解 /2人間形成の理解 /3共感的理解 /4二十世紀に大人と共に生きる子供 /5イエス・キリストと子供		143	6-11
7	198103	キリスト教保育の今日的課題三　望ましいキリスト教教育者像 1健康な人間 /2専門家としての保育者 /3両親と共に歩む保育者 /4成長する保育者 /5召された者		144	6-11
	197804	教師会　新学期①教師一同の祈り②子どもの集団生活への適応を助ける③両親に安定感を与える④キリスト教保育に対する理解	キリスト教保育	109	41-42
	197805	教師会　カリキュラム　六領域　保育の総合性　キリスト教保育のプライオリティ①ひとりひとりが身の生活に適応し、よい生活習慣を確立すること ②それぞれに与えられている賜物を用いて、人のため神のために生きる喜びを感じさせること		110	35-36
	197806	教師会　③一人一人は見えざる神の愛に生かされている掛け替えのない存在であり、又人間は互いに愛し合うべきであることを子ども自身の生活のなかで経験させること　a安定感、信頼感　b人を愛する心		111	37-38
	197807	教師会　④子どもたちが、イエス・キリストによって啓示された神の愛を知り、その交わりのなかに生き、みことばにしたがって生きる喜びを感じるように導くための基礎的経験を与えること		112	32-33
	197808	教師会（カリキュラムの骨組みとなる点）　1自由遊びのあり方①できるだけ自発的に活動させること②自分のペースを生かして遊びに没頭させること③安全を保障し、成長発達を助けること④人間関係を重んじること		113	36-37
	197809	教師会（もう一つのあり方　設定保育）題材、主題の選択/総合性、左手と右手の統一/集団思考、話し合い/カリキュラムの構造化		114	38-39
	197810	教師会（構造化の具体的な活動）単元活動/単元の設定/目的の設定/計画と実施/導入/展開/評価/望ましい単元活動		115	35-37
	197811	教師会（教材の役割）1応答的環境/2優秀な刺激/3視覚的方法		116	39-40

南信子　そのキリスト教保育論						北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要　第5号(2012年度)					
著書	年月	論文名　(小見出)	掲載誌	巻号	ページ						
	197812	教師会（行事の役割）1宗教的行事①子どもを中心に考えること②全活動が教育的であること③評価を怠らないこと④よい伝道の機会とすること/2社会における行事	キリスト教保育	117	39-40						
	197901	教師会（内容を配列する際に留意すべき点など）1保育内容の配列①系統的であること②経験的であること/2クラス組織		118	32-33						
	197902	教師会（キリスト教保育者の使命）1導き手としての教師/2私共の導き手/3幼子との出会い		119	44-45						
	197903	教師会（キリスト教保育施設の責任と使命）1キリスト教保育を支えるもの/2キリスト教保育の地域に対する責任		120	36-37						
	197609	ひとりから仲間づくりへ（見る目見えない目）	キリスト教保育	90	20-21						
8	197611	幼児とのであい(第47回夏期講習会講演要旨（1976年7月28日、於熱海）		92	15-19						
	197304	幼児観　1幼児観とは/2児童観、幼児観/3子宝/4七歳までは神のうち/5わが国における幼稚園教育と幼児観/6キリスト教人間観、幼児観		49	6-14						
	197208	本の紹介　個人と宗教（岩波現代叢書　G.W. オルポート著、原谷達夫訳）		41	34-46						
	196905	キリスト教幼児教育の今日の課題　1キリスト教による人格教育の必要性/a現代の教育と人格教育/bキリスト教の人間観、世界観、人生観の育成/c人格形成と幼児教育/2創造性の教育/a創造性/b創造性の開発/3キリスト教幼児教育の伝道的使命/a幼児の礼拝/b幼児の信仰/4キリスト教幼児教育の近代化(第10回指導者養成講習会2月10日講演要旨)		2	6-12						
	196910	教師会　行事/秋の自然観/子供の成長/教師の役割		7	40-41						
	196911	教師会　思索の月/教師の個性/文化をうけつぐ子どもたち/記録をとること	キリスト教保育	8	43-44						
	196912	教師会　（クリスマス）		9	40-41						
	197001	教師会　新しい年/就学成熟/協同遊び、話しあい		10	44-45, 39						
	197002	教師会　雪の中に咲く花/祈り/平和をつくる人/希望/世の光、地の塩		11	36-37						
	197003	教師会　健康生活/言語生活/集団生活/表現活動/知的・宗教的経験/家庭との連絡/保育者として		12	36-37, 39						
4	197004	教師会　成長の原理　a成長する力は子供自身もっている/b成長にはひとつの順序がある/c成長の速度は一樣ではない/d一人一人は独自の個性をもっている/e成長はつねになめらかに前進しない/f成長は家庭、学校、社会、国家とかさなりあった文化の中で進められる/g成長させて下さるのは神である		13	44-45						
	197005	教師会　欲求充足の原理　人間の基本的欲求/愛情による安定感/所属感/成功感/自己表現の欲求		14	38-39						
	197006	教師会　興味の原理　1興味は成長発達のしるしである/2興味は物事を学ぶ原動力である/3興味は快感をとまなう/4興味は社会化によって変化する/5興味は生活態度の基礎となる		15	36-37						
4	197007	教師会　未分化性の原理　現実と現象/知性と情緒/客観と主観/思考形式		16	36-37						
4	197008	教師会　創造性の原理　1自由な自発性を重んずる/2変化への適応力を育てる/3新しいものをつくる喜びを経験する/4直観、想像力、思考力を育てる		17	36-37						
4	197009	教師会　遊びの原理　遊びは自発的な力である/子供は遊びながら成長する		18	38-39						
4	197010	教師会　人格形成の原理　1人格とは何か/2人格形成の過程と教育		19	38-39						
	197011	教師会　習慣化の原理		20	34-35						
	197012	教師会　学習(Learning)の原理　1幼児は経験することによって学ぶ/2レデネスの問題/3身体をコントロールすることを学ばせる/4言語指導/5ものの見方、感じ方、考え方を学ばせる		21	40-41						
	197101	教師会　社会の原理　a母性的養育/b自由/c良心の発達/d集団生活/e教師の社会観		22	40-41						
	197102	教師会　視聴覚的方法の原理　1視聴覚教材利用の価値/2視聴覚教材のおちいりやすい欠点/3視聴覚的方法のあり方		23	40-41						
	197103	教師会　教育課程編成の原理　1教育課程の定義/2編成の方法原理		24	35-36						

著書	年月	論文名　(小見出)	掲載誌	巻号	ページ						
	197104	教師会　保育内容論　1保育内容を教授内容と考えてはならない/2保育内容は生活に直結していること/3子どもの活動を重んじること/4保育内容は常に総合的であること/5保育内容は子どもの成長発達に即していること	キリスト教保育	25	43-44						
4	197105	教師会　幼児と芸術性		26	39-40						
4	197106	教師会　幼児と科学性　1まわりの世界に対する驚きの心を育てる/2物事を正しくよく観察する態度を養う/3考える習慣をつける/4ひとりで考える、みんなで考える		27	41-42, 40						
4	197107	教師会　幼児と宗教性　1幼児にとって宗教性とは何か/2幼児の心性と宗教性/3信仰は育てられる/a内面的志向性/b素朴な倫理/cキリスト教世界観、人生観		28	35-36						
	197108	教師会　幼児と社会性　1社会性の発達/2社会性の発達を促進する条件/a人間関係/b自由な遊びの環境/c指導の必要性/3望ましい社会的態度		29	38-39						
	197109	教師会　幼児と自主性　1幼児期の自主性/2幼児の自主性を育てる環境		30	39-40						
	197110	教師会　幼児と安全　1幼児の危険認知能力/2事故頻発性/パーソナリティ/3安全な生活のための具体的指導/4人命尊重の思想の徹底		31	42-43						
	197111	教師会　幼児と健康　1よい環境/2よい習慣/3健康の意義		32	41-42						
	197112	教師会　保育方法論　〈1〉　1　遊びの指導/2自由遊びの教育的価値/3自由遊びの指導の留意点		33	41-42						
	197201	教師会　保育方法論　〈2〉　1生活指導のあり方/2生活指導の方法		34	40-41						
	197202	教師会　保育方法論　〈3〉　保育のための教材		35	41-42						
	197203	教師会　保育方法論　〈4〉　保育形態　1自由形態/2グルーピング/3クラス組織/4ティーム・ティーチング/5教師		36	40-41						
	196810	生きがい	基督教保育	263	4-5						
	196511	世界の幼児教育　ケニヤの幼児教育		228	2						
	195808	失われつつあるもの		141	4-5						
	195701	日本最初の*基督教幼稚園　北陸学院短期大学附属幼稚園		122	20-22						
	196107	金沢(英和)女学校付属幼稚園(高崎　毅)　*日本最初　⇒現存する日本最初の		176	16-17						
	197907	すべてのわざには時がある	幼児の教育（日本幼稚園協会）	78(7)	4-5						
	197805	日本の幼児教育の今日的課題		77(5)	4-5						
	197704	幼児教育第二世紀にむかっでの課題		76(4)	4-8						
	197309	人間の形成　人格心理学のための基礎的考察(読書のすすめ)		72(9)	45						
	197212	私の幼児教育論		71(12)	4-9						
	197101	幼稚園の適正人数		70(1)	14-17						
	197001	幼児教育のめざすもの（1970年）		69(1)	14-16						
	196811	協力の姿（豊かな二学期）		67(11)	14-19						
	196804	保育者養成のための教材		67(4)	39-44						
	196708	幼児期の重要性（幼児期　： 学習のためのたいせつな時期）　チャンドラー　キャロリン・A，　南　信子		66(8)	7-9						
	196704	幼児のはじめての集団経験（新入園児を迎えるにあたって）		66(4)	12-16						
	196607	北陸地方における幼稚園の歩みと展望		65(7)	49-55						
	196501	ケニヤに使して(四)：　ケニヤの幼児教育		64(1)	35-39						
	196412	ケニヤに使して(三)：　ケニヤの家庭生活		63(12)	21-24						
	196411	ケニヤに使して(二)：　ケニヤの社会生活		63(11)	27-31						
	196410	ケニヤに使して(一)：　ケニヤの印象		63(10)	13-17						
	196305	三才児保育の重要なこと		62(5)	10-13						
	196205	幼稚園におけるしつけ		61(5)	6-9						
	196004	指導法改善のために		59(4)	20-23						
	196507	ケニヤの幼児教育　　<学校保健研究>	←	7(7)	19-22						
	195207	おしごととの時間--保育の一つのあり方　（発行:ひかりのくに）　（未確認）	保育	7(7)	22-27						

表3『今日を生き未来にはばたく子らと共に』

目次（小見出し）	p.	初出
序（番匠鉄雄）	3	
詩　子どもたち	8	
感動と人生　保育者をめぎず若い人達へ		著書 3
学問することのすばらしさと保育理論の確立	12	
幼子との出会い	22	
保育者と呼ばれることの喜び・悲しみ・光栄・使命感	31	
成長する喜び	40	
保育の理論と実際		
成長の原理 （成長する力は子ども自身がもっている/成長には一つの順序がある/成長の速度は一樣ではない/ひとりひとは独自の個性をもっている/成長はつねになめらかに前進しない/成長は家庭、学校、社会、国家と重なりあった文化の中で進められる/成長させて下さるのは神である）	52	107004
人格形成の原理 （人格とは何か/人格形成の過程と教育/場面的要因）	58	197010
遊びの教育的意義 （遊びは自発的な活動である/遊びを通して子どもは成長しあらゆる自分の可能性を發展させる/子どもは遊びの中で、人生に必要な生き方の原型を学ぶ/遊びのためのよい環境/遊ばない子ども/遊べない子ども）	64	197009
幼児の未分化性 （現実と想像/知性と情緒/客観と主観/思考形式）	69	197007
幼児の創造性 （自由な自発性を重んずる/変化への適応力を育てる/新しいものをつくる喜びを経験する/直観力、想像力、思考力を育てる）	75	197008
幼児と芸術性 （幼児の芸術性は生活感情のあらわれである/感動する心を育てる/芸術性は学習されるものである）	81	197105
幼児と科学性 （まわりの世界に対する驚きの心を育てる/物事を正しくよく観察する態度を養う/考える習慣をつける/一人で考え、みんなで考える）	87	197106
幼児と宗教性 （幼児にとって宗教とは何か/幼児の心性と宗教性/信仰は育てられる）	93	197107
論考抄		
幼児教育における個性と創造性の育成—オープン・エデュケーションの理論をめぐって— （オープン・マインド/保育室/クラス編成/教師の役割/カリキュラム/創造性の育成）	100	198409
集団生活における人間形成—縦割り保育の理論をめぐって （家族的グループ編成/集団の多面性/自由遊び）	113	198410
キリスト教保育の今日的課題(1)多様化する幼児教育 （子どもが主体の幼児教育であること/幼児教育の理想と目標/幼児教育の総合的研究の必要性/キリスト教保育カリキュラムの構造化）	126	198101
キリスト教保育の今日的課題(2)キリスト教保育における礼拝 （幼稚園や保育所における礼拝のあり方）	141	
幼子との出会い （幼子との出会い/幼子の理解/幼子のために）	158	197611
交わりの生活 （キリスト教保育の重要性/保育の場におけるコミュニケーション/社会、世界にむかって心をひらく保育/見えない世界に目を注いで生きる群れ）	171	
生きる力を （子どもらしい遊びの回復/自然とのふれあい/よい人間関係/創造的に生きる喜び/生きる喜びの源泉）	180	199004
新幼稚園教育要領をめぐって （子どもの主体性と保育者の指導性/感性与知性）	193	
ケニヤに使して		
ケニヤの印象	209	196410
ケニヤの社会生活	219	196411
ケニヤの家庭生活	228	196412
ケニヤの幼児教育	234	196501
アメリカ人の見た日本の幼稚園		
論文「個性と協力的な集団生活の育成」抜粋	249	
あとがき	276	

3. 南信子「キリスト教保育論」の検討

3－(a)　方法論（カリキュラム論）を「三層構造論」と称し、まず基底に①「自由遊び」、次に礼拝を中心とする②「生活」、そして③「文化的・創造的活動」が、「構造化」し、かつ「統合」されなければならない。「この「統合」はあくまでも子どもの内面の「自発性」「活動性」「創造性」においてなされなければなりません。」（「証言」399)

このうち、①遊びと②生活を『キュックリヒ82』をもとに検討していく。

南は、以下の4点を　キリスト教保育の優先課題（priority）としてあげている。

a　遊びを重んずること

「遊びからくる充実感、成功感は、その子どもに自信を持たせ、生きる喜び、生きる力を身につかせます。生きる力は勇氣と忍耐を生み出します。自分の好きな遊びを選択することによって個性を伸ばす機会となり、自由を感じ、ストレスを解消し、明るい心Open Heart（オープン　ハート）を創り出し、創造性を高めます。」(82－7)

それゆえ、保育者に「良い遊びの環境を整える事」や「個々の子どもに合った遊びを、子どもと共に発見する創造性」が、求められる。

また、「遊びは、子ども達が人間関係について学ぶ貴重な機会である」。「人間は人間関係の中で自由に行動する事によって、自分を発見し、他者を理解し、集団の中の個を自覚して人間関係に目覚めて」いくからである。「ひとりひとりが生き活きと自分のしたいことを見出し、個性を伸ばす場所があり、かけがえのない友が与えられ、楽しい遊びが子ども達を魅了する幼稚園でありたい」とまとめている。(82－8)

b　生活を重んずる

南の「生活」概念は幅広く深い。また、大人が子どもに向かう基本姿勢を取り上げる延長上に「言葉」を取り上げていることにも注目すべきである。

「ひとりひとりの相違を細やかに配慮し、各々の行動の型に合った保育が絶えず試みられていることは、・・・日本の保育が今後特に取り組むべき重要なポイントであると思います。子どもが何もしないでいると、すぐ子どもに行動を促す保育者

を屢(しばしば)見ることがあります。子どもの外面だけでなく、内面を、又、全体を理解するようでなければ、個々に合った保育よりも、一斉に命令、強制する安易な保育に甘んずることになります。」

きびしい指摘である。

南は、スイスの心理学者アリス・ミラー（Alice Miller, 1923～2010）を、「大人が子どもに加える侮辱や暴力、管理は、子どもの人生を深く傷つけると告発し続け」（82－9）の人として取り上げる。⁷

「感情的な大人によって叱られることが多過ぎる体験は、子どもの人間形成にとって問題があります。絶えず管理され、命令、強制され、大人の言いなりになることが日常化した家庭の再現のような幼稚園では、子どもにとって不幸というしかありません。」(82－9,10)

「もう一つ、子どもの為の言葉の指導を怠ってはいらないことです。・・・どんなにたどたどしい子どもの表現も、温かい心で耳を傾け、心にある思いを十分に話せる人を持っている子どもは、人の話をよく聞き、よく話す子どもに成長するのではないでしょうか。幼稚園生活の中に、対話、会話の弾む食卓の時間があると良いと思います。」(82－10)

c　聖書のお話を多く聞く機会があること

南は、「幼児期に目に見えない神を信ずるのは、子ども達はファンタジーの世界に生きているからである」と、幼児のファンタジーの世界に注目する神学者レギーネ・シントラー（Regine Shindler, 1935－　）を取り上げる（82－10）。「お話を聞くことの大好きな幼児期に、どんな絵本を与えるか」は、「ものの考え方、感じ方、生き方の影響」を与えるからである。

「神に愛されていることを知った子ども達は、素直にこれを信じ、安定感を与えられて成長いたします。」(82－11)

南は、「聖書のお話を聞く機会」を「生活」の範囲に入れている。また、この部分の小見出しを子どもの側から表現している点にも留意したい。

d　子どもと共に祈ること

「聖書の物語を聞き、神様、イエス様と出会い、保育者が祈る姿やその言葉を聞いて、子ども達は、

祈りがどんな事であるかを知り、自然に自分でも祈るようになります。・・・感謝、お詫び、願い、疑い、感想、何事も素直に祈ります。病気で休んでいる友の為の祈りは、子どもにとって深い意味があり、再び元気で登園してきた時の喜び、皆で捧げる感謝の祈り、・・・祈りの経験を幼い人達と共有できることは、キリスト教保育者ならではの喜びであり、恵みであります。」(82－11)

ここには、「子どもたちが何を得るか」を超えて、むしろ保育者自身が子どもたちによって育てられるという、逆転の視点がある。

3－(b)　子どもの「発達」の系統性の先に、「神の「創造の秩序」を見る。子どもの「発達」の過程というのは、まさに神の「再創造」の過程ともいえる。（「証言」400）人間の成長の法則は、神によるものであると思います。（キュックリヒ82－11）

この部分は、『今日を生き』「保育の理論と実際」中の「成長の原理」を参照する。

「成長する力は子ども自身がもっている」(52)。それは、生命の力を内にもっているからである。保育者に必要なのは、「成熟の過程をよくみつめて、必要なよい助けをすること」（『今日を生き』53）である。

「成長には一つの順序がある」(53)が、「成長の速度は一樣ではない」(54)。個人差がある。「ひとりひとは独自の個性をもっている」(55)。「成長はつねになめらかに前進しない」「成長はたえまなく続けられていくが、時には行きづまったようになったり、後退していくように見えることがある」(56)。「成長は家庭、学校、社会、国家と重なりあった文化の中で進められる」(56)。しかし、「成長させて下さるのは神である」(57)。

ここで、「人格形成の原理」「遊びの教育的意義」をスキップして「幼児の未分化」(69以下)に読み進めたい。

未熟・未分化は、幼児の発達をとらえる上で重要なポイントである。

南は、「このことに対する認識いかんが、保育を効果的にもし、また反対に無意味なものにしてしまうことの原因となる場合が多い」(69)と書いている。

「幼児は現実の世界に住みながら、想像の世界に生きている」(69)。　幼児は大人とは異なる存在である。ファンタジーの世界に住み、想像力を持ち、「この想像力が文学や音楽等、かおり高い芸術を生み、科学を発見する力となる」「想像力の豊かな夢をもつことのできる人間が、新しい世界をつくり出す力をもっている」(70)。

その後、③「文化的・創造的活動」にかかわる「思考形式」について触れ、創造性・芸術性・科学性について展開しているので、続けてそれをみていきたい。⁸

「幼児期は・・・具体的直接的経験によって物事を把握することは非常にすぐれている。直観がするどく感受性が強いといえよう。しかもこの感覚的思考は創造的な思考へ発展する大切な架橋である」(72－73)。南は、幼児期の発達過程について、「いかに意味深く、くすしくあらわれるかを感じ、神秘であるとさえ思われてならない」(73)という。

幼児の創作的表現は、「うちなる衝動、感動が、外界の刺激によってある形をとって外にあらわれる」(75)。創造性を育てるためには、「子どもの自由な自発活動・・・自主的に考え、判断し、工夫し、表現することを重んじなければならない」(76)。

創造性は、「新しい状況や変化に適応していく人間の人格の特性である。・・・子ども自らが発見した答えこそが最良の答えである。・・・選択し、工夫して道を発見し、変化に適応する能力を、幼児の時から遊びの中で育てる事が大切である」(77－78)。

創造的能力の主軸をなすのは直観力、想像力、思考力である。これらは学習によって与えられる。」「子ども達に心理的安定感を与える環境を整え、のびのびと行動できるように配慮し、発達に即した文化的創造的活動に参加させることによって、彼らの直観力や想像力、思考力は限りなく伸びるのである。」(79)

同様に、南は、幼児の芸術性を「生活感情のあられ」(81)ととらえ、美に感動する心を養うための方法として、音楽・リズムや自由な身体表現だけでなく、「楽しく美しい話」(83)や絵本の読み聞かせ、「短い詩を読んで聞かせ、味わわせ、

覚えて表現させること」、すぐれた演劇・人形劇、彫刻や工芸品、絵等の芸術的作品にたえず触れることを上げている(84)。

注目したいのは、「保育者の語る言葉のひびきが音楽的であってほしい。心にしみとおる言葉、親しみのある愛情のこもった言葉、美しい言葉、ときには、はっとさせられるようなきびしい言葉、喜びのあふれたりズミカルな言葉、それらはまわりにかおり高い雰囲気をつくりだすと共に、音楽や文学の基礎となる大切なものをつちかう」(84－85)と、「言葉」のもつ重要性を指摘している点である。続けて、子どもたちの言葉の受けとめ方、さらには周囲の環境（室内装飾、飾る絵、壁の色、生ける花、床の感触等）への心遣いを求めている。(85)

「幼児と科学性」も、文化を意識した内容である。

知識を教え込むよりも、「まわりの世界に対する驚きの心」を育て(88)、子どもが「どうして、なぜと問う、その心を深めてやる事が大切」である。「物事を正しくよく観察する態度を養う」(89)、「考える習慣をつける」(90)、それだけでなく、まず「一人で自分だけの世界を開く経験をもつこと」(91)に注目している。

3－(b2) 幼児と宗教性

「証言」のまとめには入れていないが、3－(3)につなぐために、「幼児と科学性」に続く「幼児と宗教性」に読み進む。

乳幼児は依存して生きている。「この幼児の依存性と、依存しているものに対する全信頼、これが幼児の特長である・・・。宗教の基本は、絶対者に対する依存性と信頼性であるとすれば、宗教による教育は、まず人間が、その乳幼児期に、人生の基礎を依存性と信頼性の上に打ちたてることだが、重要な問題となる・・・。乳幼児にとっては、母親を代表とするまわりの人間に対する依存性と信頼性から出発する・・・。そしてその母親自身が、また何者かに依存し、信頼をもって生きていることが必要なのである。そこに無意識の感化を受けて、幼児の宗教性は育つのである。」(94)

続く部分も重要である。

幼児の心理的発達の特長は、未分化でアニミズ

ム的であり、そのため、「幼児は見えないもの、超自然的なものを信じやすい」(94－95)。この点から、「幼児の心性そのものが、宗教的であると考えることが多い」が、「この幼児の信仰は、そのまま大人のキリスト教の信仰につながるものではない」と明確に語る。

「この幼児の受容性が、やがて更に知的にも社会的にも発達し、聖書の正しい理解にもとづく信仰に導かれ、人間として内面的にめざめ、自覚的となることが必要なのである。」(95)

「しっかりした教育がなされることによって、はじめて信仰として育つのである。ここにキリスト教教育、信仰教育の必要性がある。」(96)

幼児の信仰と大人の信仰とを明確に区別し、同時に、幼児期のキリスト教教育の重要性にとどまらず、その後の信仰教育の重要性を強調している。

ここで、戦後のキリスト教保育の理念構築について、『キュックリヒ84・85』を参考にみていきたい。南自らの理念構築とも重なっていると思われる。先進的な人たちはこの問題に正面から取り組み、言語化した。⁹

南は、この1960～70年代における理論構築を次のように総括している。

「幼児の信仰とは何か。まだ罪意識も定かでない幼児に、イエス・キリストの十字架の救いを信ずることは可能なのか。原罪を問題にする人々には、フレーベルの、子どもに宿るといわれる神性に疑問をもつ人もありました。自然主義神学の流れを受けて、幼児期の宗教心、特に情緒に訴える倫理的な教育をキリスト教教育とする考え方に問題を感じる人々や、更に幼児への伝道や、日曜学校のエデュケーションにも反対する人もありました。その中で、キリスト教幼稚園は当時ふえ続ける公・私立幼稚園に対し、文部省が指示する幼稚園教育要領との関わりを、いかに考えるかを明らかにしなければなりませんでした。」(84－5)

「幼な子も又神の摂理のうちにあり、未完成な器であるが、神の恵みの中にいれられている存在であるものです。信仰は神の恵みに答える全人格の態度ですが、子どもは大人の如く成熟した人格ではありません。しかし、未熟な人格において、神の恵みを受容することができるのは、神の愛によってその能力を与えられているからであります。」

(84－6)

「未熟」は、人間の発達段階の特徴であり、大人が幼児よりも優れていることを意味するものではない。南信子の本意は、幼児には幼児の信仰が、大人には大人の信仰の形があるということである。「幼児の信仰は、そのまま大人の自覚的信仰となるのではなく、大人の信仰を学ぶのであり、大人の持つ正しい信仰が伝えられることによって、信仰は発生するのである」。

南は、人格心理学者オールポート（Gordon Willard Allport, 1897－1967）の言葉として、「幼児期の信仰は大人のような分化した自覚的なものではなく、或時期に一度脱皮して成長する」を紹介している。（84－6）

「知的発達の未熟、社会性の未発達の中で神の概念や愛他的な態度が言葉の上で教えられていく危険」と同時に、「自覚のない幼児への罪意識の注入は、むしろ人間をゆがめていく要素をもはらんでいること」¹⁰ も指摘する。大人と子どもの信仰を分けて考えている。

3－(c)　キリスト教の幼稚園の教師は、キリスト者でなければならないのか、教会の教育的使命はどこにあるか。（「証言」402）

信仰の学びには教師の役割が重要である。本節では、「キュックリヒ84・85」を参照する。

南は、桑田秀延による「信仰をもった人の活きた人格的な伝達のみが唯一の幼児への伝道方法である」¹¹ というくだりを引用している。そして、キリスト教幼稚園・保育所で働く保育者の使命を銘記して励むよう求めている。しかし、特に「信仰をもつ保育者」と「信仰をもたない保育者」の関係を問うていると考えられる。

すなわち、「信仰をもつ保育者」が「信仰をもたない保育者」を同労者として受け入れ、「信仰をもたない保育者」も自らがキリスト教保育を担う一員であると自覚し歩むことが求められている。キリスト教園の園長等が「信仰をもたない保育者」に同労者として向き合い、子どもたちとの向き合い方を指導していけば、キリスト教保育を担う一員であることは可能である。信仰をもつ保育者の姿勢が信仰をもたない保育者に伝わるのである。¹²

南は、「キリスト教幼稚園の子どもへの伝道は、

まさにキリストがなされることなのである」（85－8）というが、保育者と保育者の間にもキリストが立って下さる。

南は、幼児を未熟な人格としながら、「他者に対して“ありがとうございます”という言葉を用いることも自然な状態に習慣化しているように思われます。子ども達に比べて、大人はすべての点で劣り、すべてが麻痺状態であるといったら、言い過ぎでしょうか。」（85－9）という。ロマン主義的表現にも読めるが、保育者が子どもたちから学ぶ姿勢として傾聴したい言葉である。

3－(d) 教会での「教会教育」は「伝道」であるが、「幼稚園は子どもの「生活の場」そのものなのです。あえて言えば「礼拝生活」の「日常化」なのです。（「証言」400）

礼拝を「生活」に含めるのは、南の特徴である。保育の場には、「一人ひとりの子ども達が、自発的に自主性を発揮できる多様な環境が用意されていること」（キュックリヒ84－8）が望ましい。

「礼拝の姿勢は基本的には大人の礼拝と同じであり・・・保育者の話す聖書の話に耳を傾けて話しあったり、讃美歌を歌ったり、祈ったりしていくうちに、子ども達は、神様、イエス様、聖書がどんな意味をもっているかを学んでいきます。それによって礼拝の時を楽しいと感ずるように導くことが大切であります。」（84－9）

生活と礼拝のあるべき姿について、『今日を生き』所収「幼児教育における個性と創造性の育成——オープン・エデュケーションの理論をめぐって——」を参照していく。

南がめざす保育形態は、「オープン・エデュケーション」である。「証言」中の「自由保育」がそれに当たる。¹³

南は、オープン・エデュケーションが「1967年ごろから欧米で盛んに研究され今日に至っている」（『今日を生き』100）として、研究者スポデック（Bernard Spodek）の名を挙げ、「個性の伸長と創造性の育成に主眼をおく教育」について考察している。

まず、保育室について、学校の教室のイメージが幼稚園や保育所にも影響を与え、「どんな教育をするか、子ども達自身がどのように遊ぶかを優

先して考えることのない盲点が、今日まで続いてきた」（103）と批判する。「子どもひとりひとりに、その時に最も必要な望ましい環境を用意する」（103）が必要である。¹⁴

「オープン・エデュケーションでは、教師も環境の一つである。スポデックは、「教育とは、子どもと教育者の共同の創造活動である」といっている。ここに従来の児童中心主義教育とはやや異なった一面を見ることができる¹⁵。」（107）

基礎にあるのは、教師と子どもの間の信頼関係である。「自分達とすべてを共有し、共感し、共に生きようとしていることを知った子ども達は、のびのびと明るく教師の存在をかけがえのない身近なものとしてとらえる」（108）。

「助言、誘導、指示等を通して、教師は子どもとのコミュニケーションの場をいかにもつかに ついても賢明でなければならないし、・・・しかも、ひとりひとりの個性にいかに対応するかが問題であり、個々がいかに充実感をもってその遊びや活動を行なうか、さらに彼ら自身が、いかにもっている能力に挑戦できるかを見つめることが大切である。」（108）

そのために、「教師の共同体意識、連帯感」も重要である。（109）

オープン・エデュケーションは、「ひとりひとりの活動を重んじ、その過程を大切にする」（109）。「教えることの上手な保育者」、「子どもはついていけばよい」といった状態ではいけない。創造性の豊かな子どもの育成をめざし、主体的創造的活動のために、ダイナミックなカリキュラムが必要である。「保育内容によっては自由な遊びの形態をとり、ある内容は小さなグループで活動し、ある内容はクラス全体でまたあるときは、異年齢の子どももまじえて、保育者と子どもが一体となり生活し遊び文化的創造的活動を展開していくことのできるカリキュラムが作成されなければならない」。（110）

南が強調する「カリキュラム」という用語には注意が必要である。自由遊びであっても必要であり、ひとりひとりの子どもに対して求められる。

次の「キリスト教保育の今日的課題（一）多様化する幼児教育」でも、「キリスト教保育カリキュラムの構造化」が取り上げられている。

カリキュラムは、「単なる思いつきではなく、立証された仮説をもとにして、立てられているものである。またカリキュラムはどこまでも計画であり、その通りにプログラムを進めるべきであることを要求しているものではない。」（137）

キリスト教保育の中心は、礼拝である。「礼拝は、神を礼拝する時であり、子ども自身が神と出会う経験をするために、保育者は聖書について語り、祈りを捧げるのである。この時間はキリスト教保育全体のハイライトであるといえよう。」「しかも保育すべての営みは、この礼拝の精神が浸透しているべきであり、保育は福音にふさわしく進められるべきである。このような考え方を具体化するものが、カリキュラムである」（137）。

南にとって、礼拝は保育（幼児の生活）の一部である。礼拝は、キリスト教保育のハイライトでありながら、生活に溶け込むべきものである。次の記述がそれを解く鍵になるかもしれない。

南は、キュックリヒ女史(Gertrude E. Kücklich, 1897－1976) が、「日本の幼稚園や保育所では、・・・長い印象的な礼拝を守っている園が多いように思うが、ドイツでは、あまりそのような礼拝を守らせる必要はない。それは、ドイツの・・・宗教教育は家庭で行なわれる面が多いからである」と語ったことを、日本の礼拝への疑問ととらえている。また、南のアメリカ留学時、教会付属幼稚園の礼拝間があまり簡単であったことも経験している。（141－142）

礼拝は、生活と深くかかわるものである。したがって、牧師園長に厳しい注文がつく。「牧師が礼拝だけを担当する・・・のは、キリスト教保育のカリキュリムのあり方ではない」（137－138）。保育全体を理解し、そのうえで語ることが求められる。

4. まとめ

南は、キリスト教保育の基底に、①「自由遊び」、②礼拝を中心とする「生活」、③「文化的・創造的活動」からなる「三層構造論」を提唱し、その統合化を主張しているが、その中心はあくまで、礼拝である。

礼拝はイエス・キリストを聖書に基づいて紹介するものであり、後は、神様と教会にお任せする

という。

しかし、南は、「子どもの信仰」と「大人の信仰」を異なる段階ととらえ、日本のキリスト教幼稚園が、子どもの信仰を育成する生活の場であるという独自性を意識していた。礼拝を中心とする「生活」が「霊」(宗教的な内容に応答する心の部分)にも関わってくる。その際、保育者の姿勢が「不思議な力で伝わる」とみる。

「構造化」・「統合化」であるが、「自由遊び」によって「文化的・創造的活動」、創造性（直観力、想像力、思考力）・芸術性・科学性が育てられ、宗教性の育成にもつながる。南は、子どもの「発達」に神の「創造の秩序」を見る。

三層構造の基底「自由遊び」では、「子どもひとりひとりに、その時に最も必要な望ましい環境を用意」し、「ひとりひとりの活動の過程を大切にすることが求められる。したがって、幼稚園にもグループにも、ひとりひとりの子どもにもカリキュラムが必要である。

南にとって、礼拝は保育（幼児の生活）の一部である。礼拝は、キリスト教保育の中心ありながら、生活に溶け込むべきものであり、保育の営みすべてに、礼拝の精神が浸透しているべきである。

〈注〉

¹　前稿注6に追記。南信子と親しかった原瑠璃子氏（元聖和大学教授）は、『花の蕾のひらくとき』の「特別寄稿　南信子先生の幼稚園」で、「南先生が聖和の附属幼稚園で保育の責任をもっていらした時代は、1943年から1949年までで終戦前後のことです。まだお若かった南先生は、聖和の附属幼稚園で主任をなさりながら、一つのクラスも持って保育をし、また週の中、何回かは聖和女子学院保育学部でも授業されていました。」(p.383)と書かれている。

²　キリスト教保育の哲学（文中「・・・」は略した部分を示す。下線は、本論文の筆者による。(p.)は、『花の蕾のひらくとき』のページ数。）

南　・・・率直に言いまして、私は現在のキリスト教保育に危機感をもっています。年齢をとってきて焦りもあるのかもしれませんが、とにかく何をめざしているのかさっぱりわからないのです。また特に近年は子どもの数の減少ということから経営的配慮が先行するのでしょうか、「客寄せ的保育」がキリスト教の幼稚園においても横行しています。・・・(p.308)キリスト教を「売り物」にして

はいけませんよ。保育の根本を支える「信仰の問題」なのですから。

輪島　それでは、あらためて南先生のキリスト教保育論をうかがいましょうか。・・・教会における「キリスト教教育」－教会附属の幼稚園のことではありません！あるいは「教会学校」と、例えば北陸学院の附属幼稚園における「キリスト教教育（保育）」とは、どこがどう違うのですか。関連があるとするならば、どのように関わるのでしょうか。

南　・・・まず私のめざしてきた保育を「方法論」－「技術論」ではありませんよ、「カリキュラム論」といってもよいでしょう－としてご説明します。「三層構造論」といってもよいでしょう。あなたが名づけ親ですね（笑）。まず基底に「自由遊び」があります。次に礼拝を中心とする「生活」－外遊びから帰ってきて手を洗うこと、おかたづけ、お弁当を食べることなども含めて－そして「文化的・創造的活動」です。これらが「構造化」し、かつ「統合」されなければなりません。また、この「統合」はあくまでも子どもの内面の「自発性」「活動性」「創造性」においてなされなければなりません。これはなにも難しいことではないのです。キリスト者の生活というのは子どもであれ大人であれ、このような「構造」をもっているはずです。神様に祝福された人間の生活というのはそのようなものでしょう。幼稚園での子どもの生活はその「縮図（ミニチュア）」なのです。

輪島　よくわかります。またデューイをもち出すようですが、彼は、理想の学校とはまさしく「社会の萌芽的形態・縮図（ミニチュア）」でなければならない、と言っております。

南　私の「自由遊び」論を「放任主義」と誤解する向きがありますが、それは私の「三層構造論」が理解できないからです。また「個人主義的」とすると(p.399)批判する方もおられました。

そうではないのです。私はつねに「個人」と「社会」、「個」と「集団」の関係を重視してきました。私の保育理論では、子どもの「個性」と「社会性」「協同性」が調和するのです。自慢するものではありませんが、アメリカから来て日本の保育について研究し学位論文を仕上げた、コトロフという女性がいましてでしょう。彼女は第一幼稚園の保育はバランスが実によくとれている、世界一の保育だと言ってはばかりませんでした。彼女は「個」に傾いたアメリカの教育にも「集団」に傾いた日本の教育にも批判的でしたからね。私の保育理論は日本人よりアメリカ人に理解しやすいのですかね（笑）。

これであなたの質問に答えたも同然でしょう。「教会教育」のめざすところは明確ですね。「伝道」ですよ、「子ども伝道」です。そして時間的にも原則として「日曜日」に限定されますね。もちろん「主の日」としての日曜日

は私たちの生活の中心であることは間違いありません。しかし幼稚園は子どもの「生活の場」そのものなのです。あえて言えば「礼拝生活」の「日常化」なのです。

南　キリスト教保育についてもうひとつ強調しておきたいことがあります。それは子どもの「発達」をどう見るかということです。例えば「スキップ」ができるようになるプロセスを考えてみましょう。まず「歩く」ことができる、次に「走る」ことができる。地上に足をつけないで走ることができるのですね。それから「ジャンプ」ができる、片足で飛べるようになる。そして「ギャロップ」ができなければ絶対に「スキップ」はできませんね。この系統性、順序性をどう考えるか。これは心理学をはじめ実証的科学によって探究できますね。私が言いたいのはその先なのです。この系統性の意味を考えたいのです。私はそこに神の「創造の秩序」を見るのです。子どもの「発達」の過程というのは、まさに神の「再創造」の過程ともいえるでしょう。このような「信仰の眼」を私たちがもち得るかどうか、いや与え(p.400)られるかどうか、ここがキリスト教保育を考える上でのポイントです。

輪島　これは大変なことになってきましたね。となると、キリスト教教育や保育にたずさわる教師は神の「再創造の業」に「参与」しているということになりますね。何だかコメニウスの『大教授学』を読んでいるような気分になってきました。・・・十七世紀のモラヴィア（現在のチェコ共和国）出身の教授学者ですが、この人は本来ボヘミア同胞教団（ヤン・フスの宗教改革の流れをくむ教会、後に改革派と合同する）の牧師だったのです。三十年戦争で徹底的に弾圧され、教会員は離散の憂き目に会います。いわば亡命の生活のなかであの『大教授学』を書くのです。・・・子どもの教育によって世界平和を創り出そうと試みるのです。その思想の根底にあるのはキリスト教の信仰です。フレーベルの浪漫主義的教育思想より、よほど「神学的姿勢」が明確です。南先生の「キリスト教的発達観」をうかがっていると、その信仰的な洞察力には、コメニウスに一脈通じるものを感じます。南　恐れ入りますね。あなたにコメニウスとの類似性を指摘されるなんてね（笑）。最後にもうひとつ考えておきたいことがあるのです。子どもにおける「霊性（スピリチュアリティ）」ということです。なかなか説明が難しいのですが。あなたは文部省のいう「心の教育」にいつも文句をつけていますね。文部省が「心」などと言いはじめると、ろくなことがないと。それに関連するのです。・・・端的に言いますと、キリスト教保育は「心の教育」だけでは充分ではない、ということです。「心」と「身体」といいますが、そこにもうひとつ、そしてこれが決定的に大切なのですが、「霊性」が加わらなくてはなりません。「心の教育」だけではだめなのです。(p.401)あくまでも

キリスト教保育は「霊性の教育」をめざさなくてはなりません。そして極めて難しいことは、それが果して「人間の教育」に可能なのかどうかという点です。単なる道德教育でもなく、宗教教育ですらないのです。教会に関係のないご両親でも、キリスト教の幼稚園は「宗教的情操」を養ってくれるので入園させると言われることがありますね。それはそれでよいのですが、「宗教的情操」がある方向に向かわなくてはなりませんね。「イエス・キリスト」とその「父なる神」という明確な一点に。そこにキリスト教保育における「礼拝」の重要性があるのです。礼拝は子どもの「霊性」を養うのです。・・・私は、できる、できない、という「人間の可能性」を言っているではありません。「祈り」ということを言っているのです。礼拝は「祈りのかたち」でしょう。礼拝においてイエス・キリストを聖書に基づいて「紹介」することです。ただ「紹介」しさえすればよいのです。後は、神様と教会にお任せする。キリスト教の幼稚園はこの「単純な事実」に信頼すればよいのです。（*原文は「憂き身」）輪島　と、なりますと、いつもの問いが出てきますね。キリスト教の幼稚園の教師は、キリスト者でなければならぬのかどうか、という。そして教会の教育的使命はどこにあるか、という。

南　クリスチャンあるいはキリスト者の定義いかんにもありますがどこか特定の教会員であっても信仰告白が違う、などということもありますから－、また現実に教師全員がクリスチャンなどというところは極めて稀ですから、「实际的」に考えるしかありませんね。これについては牧師で園長を兼ねておられる先生方と意見を異にすることもあるのです。研修会などでよく議論しました。

先に述べましたように、私は子どもの礼拝においてもイエス・キリストを聖書に基づいて「紹介」す(p.402)ることはできると確信しています。その場合、ひとり一人の教師をしっかりスーパーヴァイズできる園長の存在が重要になってきますね。「教師と子どもの関係」と「園長と教師の関係」、それはちょうど並行関係にあるといってもよいではありませんか。人格的な交わりとして。信仰に生きる者の姿勢は、不思議な力で伝わると思います。私は最近、こんな皮肉を言って響感を買っているのです。日本のキリスト教保育は、「保育のわからない牧師」と「キリスト教信仰のわからない教師」で成り立っていると(笑)。牧師が園長をされるのなら、もう少し勉強して欲しいのです。神学校で実践神学の一部としてしっかりキリスト教教育や保育について学ぶことはできないのでしょうかね。

輪島　厳しいことをおっしゃいますね。先生の言わんとするところはわかります。最近の東京神学大学のスタッフを拝見しますと、神学者でキリスト教教育を専攻されている方がおられますね。もっとも先生のように理論と

実践が同時にわかり、なおかつ信仰理解に深い研究者はそう多くはないでしょうね。・・・

南　これがどのように用いられるか、私自身も見当がつかないのですが、できればこれから保育の道を歩もうとしている若い方々に読んでいただけないかと願っています。これはいわば「北陸学院保育の記録」「私家版」ですが、ここに寄せられた文章を「証言(p.403) 集」としてお読みなになれば、活きた保育学の教科書になります。そして、人間形成の基礎はやはり幼児期にあるということも自ずとわかると思います。生涯学習ということがいわれますが、その出発点にある幼稚園や保育園でどのような保育を経験したか、その幼い日の経験が、あなたの好きな音楽用語でいう「持続低音」のように生涯にわたって、静かに、しかしはっきりと鳴り響いて、人間の学びを導くということにも気がつくと思います。・・・(p.404)

- 3 「日本のキリスト教幼稚園は、宣教師によって・・・宣教の使命をもってはじめられた・・・保育者はほとんど熱心なクリスチャンであり・・・礼拝に力をいれ、強い長い印象的な礼拝を行なうことに努力がそそがれていた・・・。しかし今日では、幼稚園は学校教育法の中にいれられ、・・・伝道・・・の要素はうすくなって、・・・礼拝がその一部にあるといった園も少なくない・・・キリスト教保育の中心となるべき礼拝がそのような状態であるとするならば、キリスト教保育とは何であるのかと問わざるを得ません。」（『今日を生き』141－142）
「新しい時代にむかって、キリスト教保育は何を支えとするのか途方に暮れるばかりである。・・・一般の幼稚園や保育所と何らかわることのない保育内容を展開することを当然とし、矛盾した様々な行事を世の中の出来事として行ない、一週一回あるいは一カ月一回の礼拝が牧師によって行なわれるだけでは、いよいよキリスト教保育の旗印が明らかでなくなるおそれを感じ、危惧の念を禁じえないのは私一人ではないと思う。」（『今日を生き』134－135）
- 4 金子晴勇『人間学から見た霊性』（教文館、2003年）「第二部　霊性に関するエッセイ　ヨーロッパ的霊性の源流」（初出『本のひろば』2000年5月号、キリスト教文書センター）
- 5 「第一の部分である霊（Geist）は人間の最高、最深、最貴の部分であり、人間はこれにより理解しがたく、目に見えない永遠の事物を把握することができる。・・・そこに信仰と神の言葉が内住する。……第二の部分である魂（Seele）は・・・他なる働きの内にある。すなわち魂が身体を生けるものとなし、身体を通して活動する働きの内にある。……そしてその技術は理解しがたい事物を把握することではなくて、理性

（Vernunft）が認識し推量しうるものを把握することである。・・・そして霊がより高い光である信仰によって照明し、この理性の光を統制しないならば、理性は誤謬なしにあることは決してありえない。」（ワイマール版『ルター全集』第七巻、五五〇頁）。

- 6 南の著書には初出論文等の未記載が多いので、できるかぎり直接雑誌に当たり表を作成した。なお、「基督教保育」は1969年4月から「キリスト教保育」と改名、1号から再出発している。
- 7 「ミラーの提言は具体的で強く反省を促されます。愛するということは至難なことであり、キリスト教保育者は、イエス・キリストの十字架の贖いによる恵みを十分に受けて、愛と信仰において成熟しなければならぬことを思います。」（82－10）
- 8 ここだけではないが、フレーベル思想との重なりが感じられる。
- 9 日本基督教団宣教研究所第三分科編『キリスト教幼児教育の原理』日本基督教団出版局、1962年。
- 10 『今日を生き』133－134。
- 11 『キリスト教幼児教育の原理』日本基督教団出版局、132ページ下段。
- 12 園長や同僚の先生たちが共に同労者であるという姿勢を保ち続ける努力が必要と思われる。
- 13 日本の教育者・保育者が抱く「エデュケーション」の範囲は学校教育をイメージさせ、一方で「自由」は系統性を失った放任と誤解・批判されてきた。南がめざすのは、さながら「オープン保育」といえるかもしれない。
- 14 「アメリカやイギリスでは、幼児教育施設をナースリースクールといい、・・・家庭的な場・・・で、手洗い、休息の場所など、多様な空間が、一体感をもちながら連続的な形で整えられ、保育者が何人かの子どもを見守るのに好都合になっている。素足でも生活できるように床にはじゅうたんが敷かれ、採光、換気などに心が配られている。新しい幼稚園や保育所を建築するときには、必ず保育者と建築家からなるチームによって検討されるともいわれている。（『今日を生き』105）
- 15 南信子が学んだ保育は、進歩主義教育に基づき、児童中心主義とも言われた。しかし、南によれば、スポデックの理論は、大人と子どもの協同が前提にある。南は新しい保育理論を積極的に学び、かつ自分の保育理念と比較しつつ自らを検証している。